

二七九

越雪譜

初下



北越雪譜初編卷之下

目錄

淡海川さかべつらり 順上下の
 鮭の食用
 鮭を捕る打切並列
 漁夫の溺死
 鮭漁の類術
 人家の垂氷
 滝の氷柱
 寒行の威徳
 關山村の毛塚
 泊り山の大楢

鮭の字考
 鮭を出る所並 鮭始終
 撥網
 千曲川の総滝
 鮭の洲走り
 笈掛岩の氷柱
 雪中の寒行
 雪中の幽霊
 雪中鹿を追ふ
 山言語

雪譜卷之下

目

文溪堂藏

童の雪遊び

雪小座頭を降せ

通計二十三條

越後奇跡録

五卷 鈴木牧之編撰 近刻 京山人百樹剛定

此書と越後七不思議の細説并小圖名所旧跡の交跡并圖
 國中温泉の圖并主治山川勝景の圖説近古人物名譽
 傳持の餘種との奇談其地を踏尋其事就見るがごとく
 記たる假字文の書を全
 千此系葉の餘地在り空うまを以て右の書名
 を標して大方の諸君小報ト刻し先んどの好評を祈る

京水百鶴画圖

書肆 文溪堂 謹識

北越雪譜初編卷之下

越後塩澤

鈴木牧之 編撰

江戸

京山人百樹 刑定

○ 澁海川さかべつよう

我國の但言小蝶をべつようといふ澁海川のやとりゆへさかべつようといふ蝶ハ譜の虫の羽化する所と大なるを蝶といひ小なるを蠶といふ本州其種類多草花も蝶小化も事本草ゆもええすり蝶の和訓をかきひらことといふ新撰字鏡ゆもええすりさかべつようといふ名美い未考むさて前ふりける澁海川ゆて春の彼岸の頃幾百万の白蝶水面より二三尺をさるるごとく羽もたるとあつくり群が高さハ一丈あり兩岸を限りとて川下より川上の方へ飛行その形状花のまきとらんハかろろと幾里ともる流も小霞をひきさるるごとく朝より夕まで悉く川上へつぎつぎとせのるをさるる川水もええさるやどよよと日暮るとせふ

雪譜卷之下

澁海川

いしほづゝなる水面小わりのて流もごとくそのまゝ白布をさるるごとく其蝶の形燈籠やどよて白蝶之我國小大小の川と幾流もあつる小此澁海川小のまゝなりて毎年さるる此事あつても奇とをべつとさるる天明の洪水以来此事絶てり
○ 本草を按る小石蠶一名を沙蚕といふもの山川の石上小附く藓をさる春夏羽化して小蠶となり水上小飛ぶといふ件のみさつようハ澁海川の石蠶もさる其種を洪水小流し冬にさるるゆもええさるる也他国ゆも石蠶を生ざる川あり此蝶あつてもさるるゆも余此蝶をつさるるゆも近隣の老婦若きころ澁海川の辺りより嫁せし人ありゆも尋ね問ひしゆもその老婦の語りしまをさる小記せり

○ 鮭の字の考

新撰字鏡との字書ハ本朝の僧昌住といひ人今より九百四十年あまりののむり寛平昌泰の年間作りし文字の吟味をさる書にむじより世の学匠より傳へ字して重宝せしきまをるを近き頃村田春海大人右の書を

京都ゆき購得てのり享和三年の春創り板本とす一世の重宝と有りて
より後の学者の机上不置ハ實ハ春海大人の賜有りけり右の字鏡ありて
后二十余年を歴て源の順朝臣の作りたる和名類聚抄ありき是も字書之
元和の年間那波道四先生創りて板本とせしとす^{後の板}ありき和名抄ありと
后五百年ちりくをへて文安年中下学集とす^{トモ}字書ありきとすも元和三年
創りて板本と有りたり下学集より五十三年の后明應五年林宗二^{坂のせつら}町人節用
集を作り文龜のころの活字本ありとす^{セト}いろは引節用集の権輿之其右
百八十年を歴て元禄十一年小模寫昭武駒谷山人が作りたる^{江戸}人書言字考
一名合類節用集とす^{ハシ}板本あり宗二が節用集を大成し^{ハシ}る物也といは引
平他字類抄の^{ハシ}下引本朝の字書の^{ハシ}大抵ハ件のごとく^{ハシ}今俗用と
用せし^{ハシ}ハ^{ハシ}本朝の字書の^{ハシ}大抵ハ件のごとく^{ハシ}今俗用と
節用集ハ新撰字鏡和名抄を先祖の父母とて^{ハシ}後のハ皆其子孫之是ハ^{ハシ}字
の事を言んとす^{ハシ}童蒙の爲小先り^{ハシ}けり ○新撰字鏡奥の部小^{ハシ}鮭^{ハシ}

雲譜卷之下

又漢堂藏

とあり和名抄ハ本字ハ鮭俗ハ鮭の字を用ふ^{ハシ}非^{ハシ}とありき^{ハシ}鮭の字
を用ひ^{ハシ}も古^{ハシ}同書ハ崔禹錫が食經を引^{ハシ}鮭其子^{ハシ}苗小似^{ハシ}赤^{ハシ}光り
春生^{ハシ}とて年の内ハ死^{ハシ}を故^{ハシ}小^{ハシ}年魚と名^{ハシ}くと^{ハシ}え^{ハシ}たり新撰字鏡ハ鮭の
字を出^{ハシ}ハ鮭と鮭と字の相似^{ハシ}を以^{ハシ}て傳字の誤りを傳^{ハシ}へ^{ハシ}も^{ハシ}あ^{ハシ}り
ど鮭ハ河豚の事^{ハシ}る^{ハシ}と^{ハシ}下学集も鮭干鮭と並^{ハシ}出^{ハシ}せり宗二が文龜本の
節用集も^{ハシ}塩^{ハシ}干鮭と^{ハシ}り^{ハシ}と^{ハシ}り^{ハシ}も^{ハシ}鮭と鮭と傳字の^{ハシ}あ^{ハシ}り^{ハシ}あ^{ハシ}
駒谷山人が書言字考ハ^{ハシ}○鮭^{ハシ}○石桂魚^{ハシ}○水豚^{ハシ}○鮭と出^{ハシ}て注^{ハシ}ハ和名抄
を引^{ハシ}本字ハ鮭とあり大典和尚の学語編ハ鮭の字を出^{ハシ}と^{ハシ}り^{ハシ}鮭と
あ^{ハシ}り^{ハシ}ト訓^{ハシ}ハ唐の字書ハ鮭ハ大口細鱗とあり^{ハシ}鮭小^{ハシ}あ^{ハシ}せ^{ハシ}る^{ハシ}る^{ハシ}字彙
ハ鮭ハ鯉の本字^{ハシ}ゆ^{ハシ}魚臭^{ハシ}と^{ハシ}ハ字^{ハシ}と^{ハシ}り^{ハシ}按^{ハシ}ハ鮭の鮮鱗ハこと^{ハシ}
ら^{ハシ}魚臭^{ハシ}きの^{ハシ}の^{ハシ}ゆ^{ハシ}あ^{ハシ}あ^{ハシ}ん^{ハシ}鮭ハ鯉船の一名^{ハシ}とも^{ハシ}り^{ハシ}鮭ハ^{ハシ}り^{ハシ}遠^{ハシ}
し^{ハシ}と^{ハシ}は^{ハシ}鮭の字を知りて俗用ハ鮭の字を用^{ハシ}ハ^{ハシ}件^{ハシ}の^{ハシ}如^{ハシ}

鮭けほの字も古く用ひまづかやくの和文章にも鮭の字を用ふ。鮭の字ハ昔のハ通じ難し。又ハ姑く鮭ふ从ふ

○鮭の食用しやうりやう

醒さめて喰くむハ○臭く軒けん○鱈たら○鮓す之の烹ひる○炙あその料理りやうりふよりハ猶なほあるハ鮭ふを塩しほ引ひき干くす鮭といひも古き事ことまふ引ひる書よふ又ハ延喜式えんぎしきのせう内子ないこ鮭ハ今いまハ子こ籠かごり鮭の事ことるハ又ハ同書どうしよハ脊腸せいちやうをとりて訓しり丹後信濃越中たんごしんのうえちゆう越後えちごより貢こうぎともる也も又ハえハまづ古代こくごハ鮭を供御くぐふも奉ほうりる都みやこ遠とほきよりる也塩しほ引ひるハ頭骨づかほねの澄すみ微ころを氷頭ひづともる也鱈たら小こ雀さず之の子こを鮓すといひる也鮭ふも美味びみとも子こある也を塩しほ引ひふ也を子こ籠かごりとのハ古ふるのハりといひも是こるハんハ本草ほんぽうハ鮭味をハ甘あまく微温びんぬん毒どくなハ主治しゆぢ中ちゆうを温ぬるめハ氣きを壯さかふも多く喰くむ痰たんを發はせとりて我國わがくにハ塩しほ引ひふ也を大晦日おほひのひの

雪譜卷之六

三 大漢堂藏

節せつハ用もちひぎる家いえ々々又病人あひまも喰くむ他国たこくハ腫物しゆぶつふハりといひる也る也又ハあらわん

○鮭を出です所ところ

鮭ハ今いま五畿内西国ごきないせいこくハ出です所ところを聞きる東北とうほくの大河たいがの海うみハ通とほる也又ハ鮭あり松前蝦夷地まつぜんえいじ最多おほく塩しほ引ひともる也諸国しよこくハ通商つうしやうハ此地こゝハ限かぎる也又ハ我われが越後えちごふ多おほく又信濃越中しんのうえちゆう出羽陸奥でわろくおハ常陸ひさかたふもありともる也其その所ところの食たふも不足ふそくのハ通商つうしやうをふる也江戶えどハ利根川とねがわハありともりとも稀まじる也初鮭はつさけハ初鮭はつさけの價あひ比ひをとりて我國わがくにハ毎年まいねん七月二十七しちがつにじゅうしちにち日にち所ところハある也諏訪すわの祭まつりりの次つぎの日ひより鮭の換かひをとりて十二月じふにがつ寒ふせのハあける也の終はつりとも古志こしの長岡奥沼ながおかおくぬまの川がわハありともも換かひる也一いち番ばんの初鮭はつさけを換かひ師し長岡ながおかハもまづ例れいともる也鮭一頭ハ一頭いっとうをとりて朱七俵しゆしちべいの價あひを賜たまふ也猶なほ小こなる也定さだめありる也俵べいのハ下くだる也鮭の大おほなるハ三尺さんせき四五寸ごしゆすん小こなるハ二尺にせき四五寸ごしゆすんともる也

男魚女魚の名ありゆるる子あるゆゑをちよりのハ價貴し五番まで奉りて
 后を賣る初鮭の貴きゆりかしてあづりしことを賞するや江戸の初鯉魚
 小をさくしかきとぞ初鮭ハ光り銀のごとくふして微青となり肉の色紅をぬ
 りゆるが如し仲冬の頃ふいそむば身小班の錆りて肉も紅の薄し味もや劣
 たり此国あそく川口長岡のあよりを流る川めて捕りゆるを上品とを味ハ他
 小比とむば十倍の僅小其地を去まば味ハ美らとぞその味ハ美らるものハ北海
 より長江を洩りて困苦なるの度小あそむるゆゑあるん魚急浪小困苦ハ味
 ひるらとぞ甘美のものと北海の魚の味ハ厚と南海の魚の味ハ淡の差ハあ
 ぐごとし

○鮭の始終

我國の鮭ハ初秋より北海を出る千曲川と阿加川の兩大河ハ洩るこま
 其子を産んとて之女魚小男魚隨てのづる洩る事かよて五十余里河ハ在

海川奇蝶之圖



事をもよを五ヶ月あまうりこその間あひだ八十九十人小捕とらるところとさざうへ海へく飯める故小大
 小あり子を産うつける所ハかまふ心小ありて一定あるとともども千曲ちまと魚野うその両
 河の合あまる川口とふより沙ま小石のまじるゆゑとさよりをのまが産所うと流なが
 まの絶た急いくぬ清き流水りうの所小産うくらまんとして鮭さけの捨すく群むるを漁師まのま
 とぶ小掘ひつくとさまふつくとともりゆ沙まをりるふさまぐのくまをるまめ女め魚う男お魚うともふ
 尾おをもて水中すいの沙まを掘ひるその廣ひろさ一尺あまうり深あさ七八寸長ながさ一丈あまうり数日
 ふしてとさまを作つくるつくりをまさまぶ女め魚うそのうへこ鮓すを一粒つぶづ産うむらむをまさま
 男お魚う己おが白しろ鮓すを弾ひ着つ直ち小女め魚う男お魚う掘ひのけくる沙ま石いを左ひだり右みぎより尾お鮓すゆく
 ままひひくくけて鮓すを埋うむ一粒つぶも流ながさま事ことをせまさまて此こゝ一ひと掘ひ小産うをまさまぶ又またとさまふ
 並ならび掘ひりてま産うらまてまりり幾いく條まもまさまりりて終ついめま八九尺四方そのあたの沙ま中なかへ行ゆき
 よく腹はらの子こをまさま産うをまさま或あるハ所ところを替かへま産うとま沙ま小こ礫れきの交まりまる
 所ところ小ありさままま産うとま漁師まがりりその所ところ為ため人の智ち小こをまさまくまかまとままま

産終るまでの困苦のこゝろ小尾鱈を換ひ身瘦勞とるがまふあつひとくでり
深淵ある所小いこゝろ小沈居て勞を養ひりとのごとく肥太りて再び流
小沈る掘りつゝある時ハ漁師もこゝろをこゝろ掘りて捕るりのあまごも強て六
せぬ子之女魚まるといふとゞ男魚ハ其所をさるゝを鮎の河小沈る子を産んと
てこゝろの女魚小男魚随てのり入子の為小女魚を助るるんこゝろも又人の
心ふこゝろるるげまて奇ある子ハ河の廣き場小く鮎を産まざる所供水を
あて瀬らりて河原とるりハ幾とをさるゝも産る子腐れやとゞ比瀬とるる
その子生化して鮎とる一年我が住む所の在りて奥野川のやとり小住む人
井を掘り小鮎の腥りをやりいせり多ありと友人がかり死鮎の生化を
を漁師のこゝろ小をやけるともいふ早化身化鮎水小ある事十四
五日小く魚とる形ち糸の如く二寸腹裂て腸をさるゝも多小佐々の名
ありとのい傳ふ春小いといふ長くと三寸あまり小あるこゝろをさるゝを捕らぬ事

雪譜卷之下

とを此子鮎雪消の水小随ひて海小入る海小入りてのち裂る腹合して腸をさ
るとと換父がかり前小もりて如く鮎の換ハ寒中を限りとを寒あけて捕ら
崇をさるゝといひつゝ我が若りて時水村の一農夫寒あけて后瀬のとりに
鮎を奪ひこゝろを喰ひて熱小るを三日小く死する事ありまゝとゞたりあると
いふ口碑の説も証とるゝを又く産まざるをさるゝをこゝろをさるゝその家断絶をとい
ひはるゝ鮎の大きるハ三尺四五寸小あるもあり之ハ年々細を脱とる長くとる
るん我が若年のこゝろハ鮎あまごこゝろをさるゝをさるゝの價もいやりて近年ハ
捕る事少きも多價もあつゝむり小倍せり年々工を新小く換るるも多
捕減りたるるん女魚の大きるハ小鮎一升もあり小るハ三四合小をさるゝ江戸小
多くもてあつゝ塩引と唱るゝ鮎鮎とて越後の鮎とハ一品別種る物なりと
或物産家のいりて河小生まると海小成長をさるゝもむりより海中細小入
る事多し其始終をいふ小鮎ハ鱈族の奇魚といふ也

牧之常ふもつゝ寒気の頃捕らる鮠と男魚の白鯨とをま
し人鮠居る川の沙石ふ包を瓶やうのものふうつゝ入と鮠をさ
国の海に通る山川の清流ふかの瓶ふうつゝ入るをらごを沙石
のまきけのうとつける如くふるゝおた此川あつゝ鮠をくとも
三年捕る事を国禁あつゝ鮠を生せんもあつゝば生せば国益
ともあらんゝ江戶の白魚はむゝそのよをうゝあひゝとをまつゝ

○打切り並ふ

北海新泻の海門ふかつゝ大河を阿加川と千曲川と千曲川のふらふらふら
千曲川の水源は信濃越後飛驒の大小の川とあまゝ流と併て此大
河をふと越後へ妻有上田の二庄をうゝと奥野川の急流をうゝ奥沼郡
藪上の庄川口驛の端ふいりて信濃を流る川と合して古志郡蒲原郡の

中央をうゝと海へ入る信濃の流は濁り越後へ清り信水八岸川の濁水
あつゝ鮠初秋より海を出て此流へ休る蒲原郡の流は底深く河廣ゆゑ
大網を用ひて鮠を捕るか川口驛より上上田妻有のあつゝ打切といふ
事をひらゝと鮠を捕るその仕方夏末より事をためて岸根より川中
丸木の杭を建つゝ孫横木をそえと透間を竹箒をこゝと塙のおとふ
と川の石をよせかけ力とる長さ六百間二百間ふらう周圍形ハ川の便利
ふとふ船の通路ハこを除去と障りをとる又通航の路印を建つ夜
為とをさしてふつゝといふ物を箒下へあつゝ鮠の入るべきやうふらゝかゝと
此つゝの作りやうハ竹を箒ふあつゝ末を縛り鮠の入るべき口の方ハ
竹の尖を作り上げて腰をうゝ地ふつゝ方ハひら上ハ丸く胸ハ膨張あり
長さ六五尺をうゝと鮠入らんとをさバ口廣グやうふらふら功ふ作りたるもの
こををつゝといふハ筒といふべきを濁り記するらん田舎言語ハ古言のまを

いひつゝちりをまのぶもあまご言の清濁をとりちぐく物の名るどのか
まもも多一 阿加川を断ちて さて此打切を作ら幾なるの費ある事由多漁師
ども語らひあひくまもる子之打切ある岸に假小小屋をつくり漁師ども
昼夜さふありて夜も寐せしむ 鮭のかゝるを待て七月より此業をすそぐ
て十二月寒明まぐ一連のりのからるく 此小屋ありて鮭をさる此打切ハ川口を
一番とく氷上ハ十五番までありらるらぐの持とく川ふその境目ありて
をさるるご嚴重之 ○さて鮭ハ川下より流ふ所より打切ふり船のうよへさ
所ハ流と打切ふせりさるく小滝をさるる多滝ふのびるをいさうや大く打切の
よふふりさうかの垣ふせり潜るべき所やあるとらかてをさるる結つをさ
る所ふりさうらぐりいせんとてさふ入る底あるゆゑいせんとさるふ口ふ尖
りの腮ありて出る子ありさる ○さて小屋ふありのふかりつゝんとさるふ
をさるり 大木を二ツふりててまを
かりぬそ毎ふあるもの
舟を用ひ

雪譜卷之下

雪下る寒夜ゆも銭の為ふそのさしきをもいさる赤裸ふありて水ふ飛入り
つをさるる一 鮭あまづつのみまふ入さしきをいさる大鮭ハ三尺あまりを
あるもの 鮭狂ふゆ多魚揆といふものゆゑ頭を一打うて立地死さるふ奇な
るゆゑ此魚揆といふもの馬の尻をさるる揆ふあまづ死せむ私ふつり
さるつちゆゑいさる打ても外を又うさる頭ふ打ぎ取もありと漁夫らり
鮭ある所ゆゑいさるゆゑも此ゆゑを 助買 とて鮭の仲買するもの此小屋ふ
用ふる馬の尻をさるるゆゑ 助買 とて鮭の仲買するもの此小屋ふ
きてりさるさけをさるるゆゑ

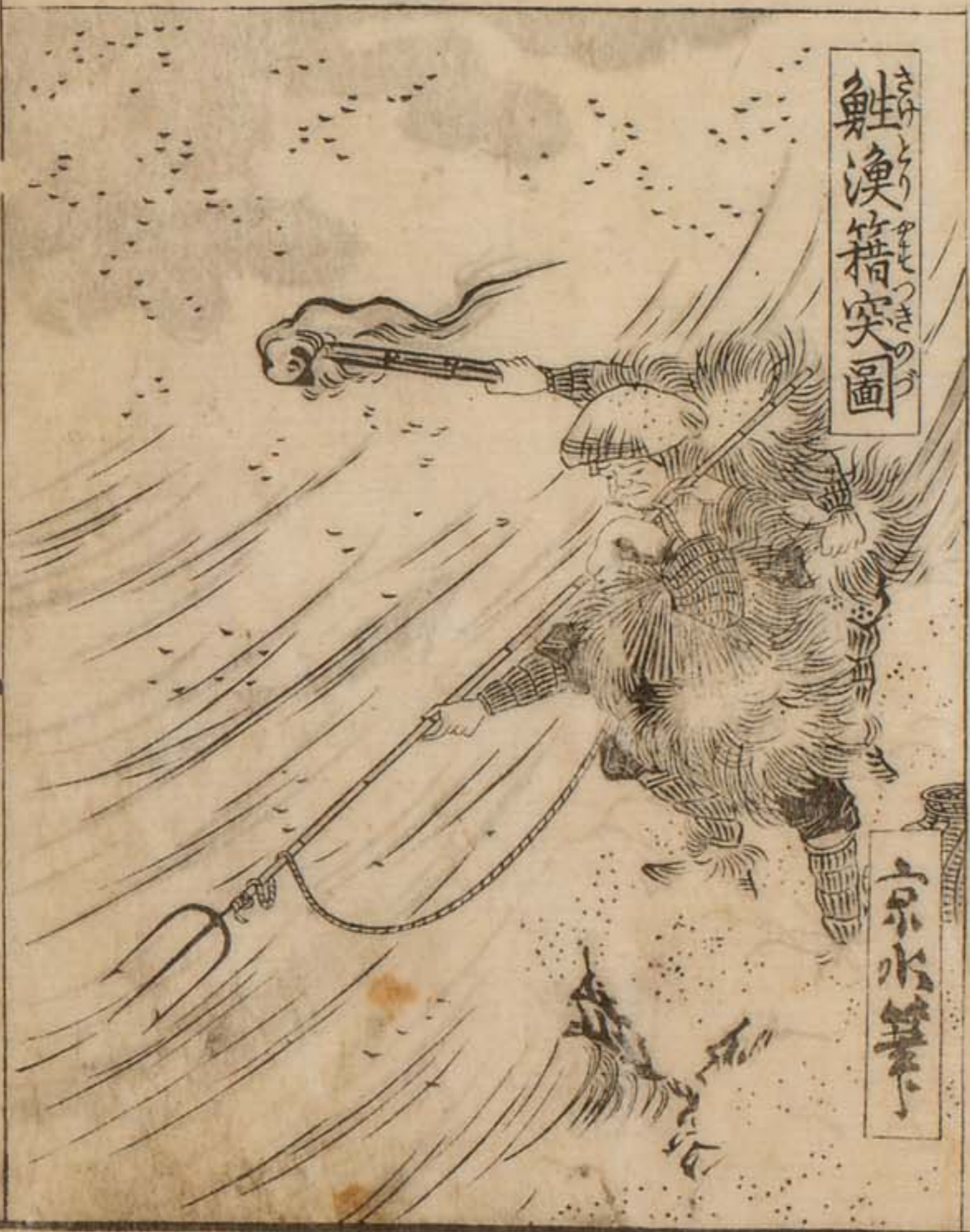
○搔網

かきあまると攪網あり 鮭を攪ひ捕るをいさるその攪ひ網の作りやうハ又ある木
の枝を曲げあつせり 飯櫃ありふ作りてさふ網の糸をつけ長き柄ありて
くふまうりてを岸の阻る所ハ鮭岸ふつさるのゆゑ岸ふ身を置むら
りの架をさるるゆゑさるる腰ふ魚揆をさる 鮭を搔探りてまふいさるる

岸の絶壁ある所ハ木の根ハ藤繩をくく架を釣りこみ居て搔烟
 をもちも稀小あり幾尋ともるた深淵の上小このころをつりて身を置一條
 の繩小命をつるぎとらくとその業をるを子怖ともおもひらざるハ此事ふるま
 ころゆあるぞ



鮭漁箱突圖



京水筆

鮭の縮圖

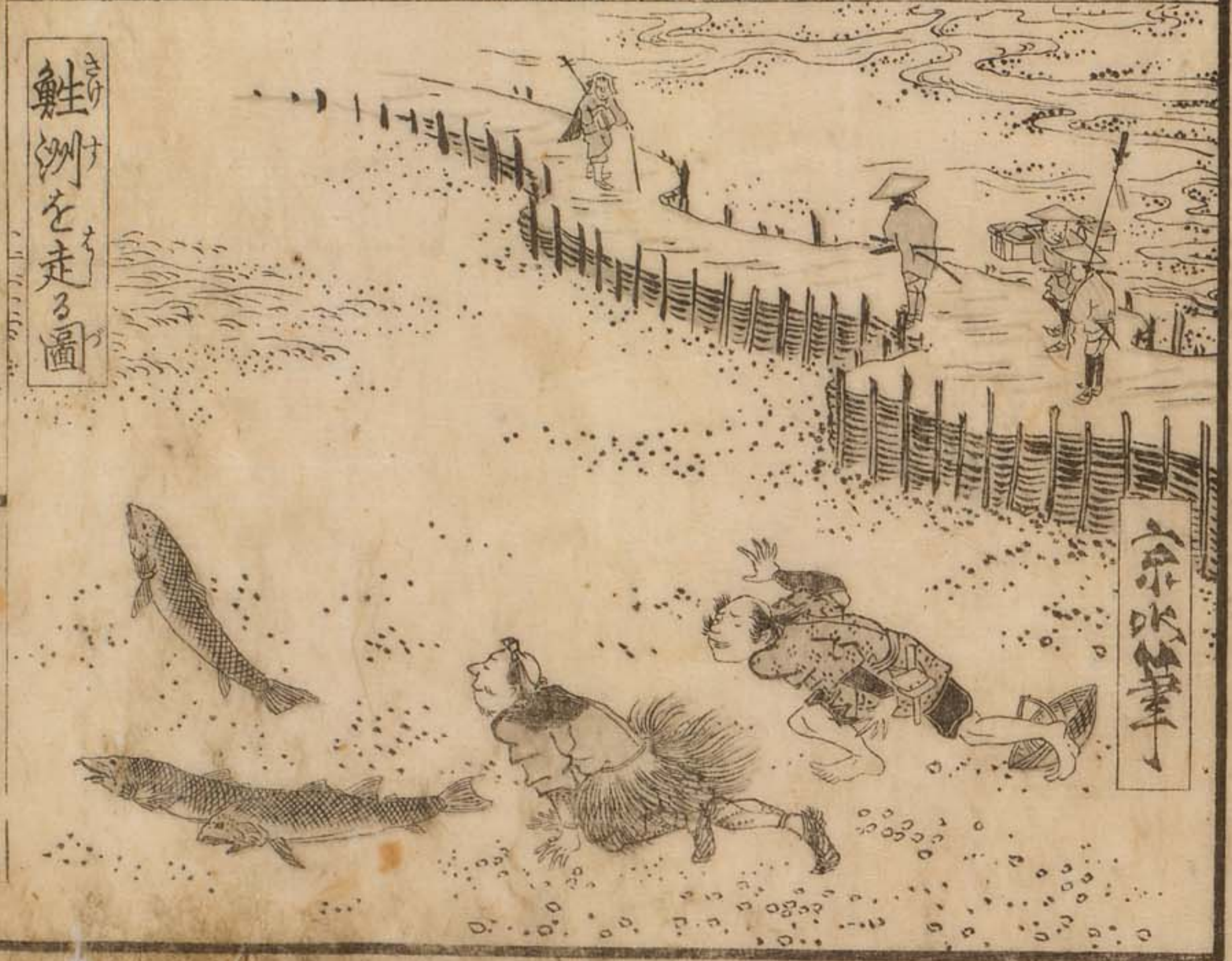
絶壁強網の圖



鮭渙打切の圖



救之画図



鮭洲を走る圖

余水筆

○ 澳夫の溺死

或^{ある}村^{むら}不^ふ祥^{しやう}の事^{こと}ゆゑ^{ゆゑ}夫^{おつ}婦^めとて^と母^{はは}一人^{ひとり}を中^なら^まひ^ひ五^ごツと三^{さん}ツ^つふ^ふる^る男^{おとこ}女^めの子^こを待^{まち}
 たる農^{のう}人^{にん}あ^あり^りけ^りり^り年^{とし}毎^{ごと}小^こ鮭^{さけ}の時^{とき}ふ^ひと^とま^まぶ^ぶそ^その^の澳^あを^をり^りて^て生^{せい}業^{ぎやう}の^の助^{すけ}と^とせ^せり^り此^{こゝ}
 所^{ところ}ハ^はま^まづ^づ岸^{きし}阻^{とど}る^るゆ^ゆゑ^ゑ村^{むら}の^のもの^{もの}の^のお^おの^のく^く岸^{きし}ふ^ふう^うの^の架^かを^を作^{つく}り^りて^て搔^か網^{あみ}を^をる^るを^をま^まる^る
 小^{せう}絶^{たつ}壁^{かき}の^の所^{ところ}ハ^は架^かを^を作^{つく}る^るもの^{もの}も^もあ^あり^りま^まぶ^ぶ鮭^{さけ}も^もよ^よく^くあ^あつ^つま^まる^るゆ^ゆゑ^ゑ村^{むら}の^の男^{おとこ}ら^らも^も架^かを^を
 つ^つり^りか^かろ^ろ一^{ひと}ま^まぢ^ぢの^の繩^{なは}を^を命^{いのち}の^の綱^{つな}と^とて^て鮭^{さけ}を^をと^とり^りけ^りり^りま^まて^て十^{じゅう}月^{げつ}の^の頃^{ころ}ふ^ふい^いり^り雪^{ゆき}
 降^ふる^る日^ひ中^{なか}ハ^は鮭^{さけ}も^も多^{おほ}く^く獲^え易^{やす}き^きもの^{もの}ゆ^ゆゑ^ゑ一^{いち}日^{にち}降^ふる^る雪^{ゆき}を^をも^も厭^{いと}む^むを^を兼^あ笠^{かさ}立^たふ^ふ身^みを^をか^かて^てあ^あ
 朝^あより^{より}架^かふ^ふあ^あり^りて^てま^まけ^けを^をと^とり^り畚^{おこ}ふ^ふと^とり^りあ^あら^らる^る時^{とき}ハ^は畚^{おこ}め^めも^も繩^{なは}を^をつ^つけ^けお^おけ^けを^を
 お^おの^のま^まま^まづ^づ架^かを^を鉤^{かぎ}ら^ら網^{つな}ふ^ふ縫^ぬり^りて^て絶^{たつ}壁^{かき}を^を登^{のぼ}り^りま^まて^てま^まを^を引^ひお^おづ^づと^とつ^つる^るふ^ふま^まぢ^ぢが^がり^り
 て^{のぼ}登^{のぼ}り^り下^{くだ}り^りま^まる^るも^もこ^こま^まふ^ふ慣^なて^てハ^は猿^{さる}のご^{ごと}と^と一^{いち}物^{もの}喰^くふ^ふ時^{とき}も^もの^のが^がる^る之^{これ}日^ひも^も暮^くる^るて^て雪^{ゆき}荒^あ
 ふ^あり^りけ^りま^まづ^づ雪^{ゆき}荒^あゆ^ゆら^らる^るゆ^ゆゑ^ゑ鮭^{さけ}え^えや^やま^まま^まづ^づか^かゆ^ゆゑ^ゑふ^ふら^らる^るび^びう^うの^の架^かふ^ふゆ^ゆら^らん^んと^とり^りあ^あを^を
 雪^{ゆき}荒^あゆ^ゆら^らる^るま^まづ^づと^とて^て母^{はは}も^も妻^{つま}も^もと^とあ^あら^らる^るを^をま^まま^まづ^づ炸^ばを^を用^{もち}意^いし^して^て架^かふ^ふあ^あり^りて^てか^かま^まの^のま^まを^を

せしふをてしはけもまこえしゆ多鶴飼の謡曲ふうごごとく罪も報も名
の世も忘さそをてかゆらうくや時をぞうらうらる○かくてその妻ハ母も即
子どもの寐くしまばらの雪あきふ夫ハさを凍え玉やめ行むらうつと飯
らんと羨ふその帽子をかぶり松明をてうらうふ二本を用意し腰ふは
かこふしう松明をあげてさし下ふあつ夫ふとさうけいふさむら
ん初夜もりつらさむつらんゆやちて飯り玉飯もあつふして酒ものも置
たりいざうり玉しすもあつらうて機も入るやうありいぞをさも持来たり
とゆも西かとの雪荒ゆてよくもささえば櫓をあげていふ夫ハさを
きつげようらぶよ鮫ハあまうらうらうらあまはうらよりさうさ酒をのび
今をさし捕てえんそらふささうらとゆあつら松明いさふかんと燈
るまも架をつりとあて綱をくしう樹のまふさし別このまふの松明ふ火
をうらうて立ちうねとまぞ夫婦ハ一世の別このありける○さうやどふ妻ハ家ハ

雪譜卷之下

文溪堂藏

かり炉ふ火を焼さあわらうらものくらせんときめぐふまうら待居り
小時うらごども飯りきてさむらびくふらびらの所ふらうらふらの
ささうらなまらもささむ持するさまらをうらうて下をささふひりもよら
とらうて夫のまらささえうらごどもさのまらうらごどもささささ架ふらさ
あやさうらあもらぶらうと心をさあら松明をうらうて登り跡の雪
あやとあうらをささむらせん木のまらささささささささささささ
ありてささふ心つきささ持するなまらうらうら櫓うらふささ架をくし
のつら焼残りてありてささをささよりむらせまうらさまらさささささ
かきうら架あちう夫ハ深淵ふ沈うらうらうらうらうらうらうらうら
夜の早瀬ふあちう手足凍え助り玉ふを死便いあうらうらうらうら
いひさけうらうと涙を啼ふあささうらうらうらうらうらうらうらうら
を投んとあつらうら又あちうらうらうらうらうらうらうらうらうら

○鮭の洲走り

まけのすきしる雪前小河原さぶあわさるふかきあせあせあせ人ゆも追
りまらぐりて水を飛離さる河原小のざり細ある野をこえさく水小とび入りて
あまを退さる此時ハ大鮭さぶあまをこえ水をまらるまらよりわさる小鮭さぶ
后小随ひさのざり河原をまらる事四五間小をさぶさぶも箭のごうくして人
の足もかよびぐりてさぶあまをこむ大鮭の物ふまらりて横小倒さる時ハあとり
あてひさる鮭もあまをこむさぶあまをさぶさぶあまをさぶさぶあまをさぶさぶ
して手も濡さぶ二三頭のさけをうさるありかき足無して地をまらる倒さる
あまび起さるるを魚族中比ぶさぶさぶのさぶさぶ奇魚といふ

○毒氷

前年牧之江戸小旅宿の頃文墨の諸名家小謁して書画を乞ひ一時前の
山東庵小の交情厚くありてまらるく訪ひ小京山翁當時ハいさぶ若年な

雪譜卷之下

十三

文溪堂藏

りしる時雪の語ふつけ京山翁いさる今年正月友人らと梅見小ゆさる
くさ青樓小のざりその曉雨さるいさるさぶあまをさぶさぶあまをさぶさぶ
日本堤小さるくさ小堤の下小柳二三株ありその柳小くさる雨毒氷と
ありて二三すづ枝毎小ひとまらりさるが青柳の糸小白玉をつらぬさる如くあ
ま小旭のがさるさるいさる好景ありさる堤の茶店小あまをさぶさぶ
ひさるさるさる詩を作りさる事ありさるさる餘寒の曉小雨のさるさる
さる気運の機工を得てさる奇景をさるさるさる珍さるさるさるさる暖地
あまらるさるさるあまをさぶさぶ我國の毒氷小比さるさる氷席の小尻と心小をさ
とまらひさるさるありた○さるく我國の毒氷をいさる小他小姑く舎さるさる我が
家の氷柱をいさる表間口九間の屋根の簷小初春の頃の氷柱幾條もさる
びさるさるさるその長短ハひさるさるさるさるさるさるさる根の太さる
二尺りさる小ひさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる我が

潤うるひが津つとあり氷柱つらとありて玉簾たまのりをうけ周めぐりてさうありてまも又
てふぶきものなりさてまことの滝たきもあたる氷柱つらとあり玉簾たまのりの内うちも滝
をかきとありて四辺よっぺハ亂瑤らんぎょう細玉さいぎよの雪中ゆきなかハかの玉たまを出だすの崑山こんざんもかくやと
あつらふかゝる奇景きけいも獵師りやくし樵夫せうふのやうなる人ひと稀まれとてまを暖国だんこくの人ひとふもあつら
いふめづりてさうかゝるん牧之まきの拍崎はくさきより妻有つまりの庄むらハ山越やまこえさる時とき目前まへふ
んさる所ところ

○雪中ゆきなかの寒行さむやう者もの

我が家うちハ江戸えどふ二ふたとせ居ゐる樸ぼくありくまきりりハ江戸えどハ寒念さむえん佛ぶつと
て寒行さむやうをまゐる道心どうしん者ものあり寒さむ三十日さんじゅうにちを限りて毎夜まいや鈴すずが森もり千住せんじゆふけり刑けい
死しの回向えんぐうをまゐるそのまが六股引むつひき草鞋くさげゆきあてりふ着きてつとあつらり又
寒中さむなか裸参はだかまゐりといふあり家作けさくふかゝるまての職人しやくじんの若人わかしよらあつらり
そのまが六常むつじょうより長く作りて挑灯てうとうふ日参ひつまゐるどの文字もじをまゐりてあつら

雪譜ゆきふ卷まき之下のした

うらをうら持裸もちはだかゆき鑊くわくをまゐりてさうかゝるん江戸えどハ寒念さむえん佛ぶつと
佛ぶつへまゐるとまゐるんときる時ときハくまきりて水みづを浴あぶ寒中さむなかの夜よハ幾人いくにんも西東さいとうへ
をまゐりてさうかゝるん我が國わがくにの寒行さむやうハ事ことハてまふ似にてその行ゆきハまゐるまゐり異こと
て我國わがくにの寒中さむなかハ所ところとて雪ゆきあつらるハく寒さむ氣きのまげりまゐりてまゐりてさうかゝるん
くその雪ゆきをまゐりて毎夜まいや寒念さむえん佛ぶつ又ハ寒大神さむおおかみまゐりて寒中さむなか一七日いちにち或あるハ
三七日さんじち心こころと日ひをまゐりてさうかゝるんかのみ志こころざしを神佛かみぶつへまゐりてさうかゝるんハ農人のうじんの若人わかしよら商あきな
家うちのりてさうかゝるんハ業わざをまゐりて夜中よなかふまゐりてさうかゝるんハ昼ひるのいさむのい
日ひハ三度さんどづつ水みづをあぶ猶なほあつらるんハ心こころと禁いんとて身みを拭ぬぐハ事ことをせぬとてさうかゝるん
あつらるん衣服いふくを著ちやくて坐まするハ米糲こめこの穂ほの方かたをまゐりてさうかゝるんハ扇あふぎのさうかゝるんハ
てさうかゝるん坐まするハ此こゝハ七五しちごかりゆも常じょうのごとくハ居ゐるさうかゝるんハ東あづま縁えんさ
稿かたハ帯おびふまゐりてさうかゝるんハ行ゆきの中なかハ无言むげんゆき一言いちごんもいさむ又母ははのやう妻つまと
りとも女おんなの手てより物ものをとて精進しやうじん潔けつ濟じハ勿論もちろんハ他の人ほかのひともかゝるんハ腰こしふまゐりて

寒行者威徳之圖



笈掛岩大氷柱圖



家ふりしりもんごろうふ回向まうりやうをこそまをも行まうりやうの二ふたとをよるゆふ不幸ふこうありて
 目のよぬりしゆへまがうらぶ行者まうりやうのまをまらるものくらせんるどけりゆふ清くして
 待まち之寒念佛寒大神さむかたがみありの苦行くまうりやうありま一ひと件けんのごとくうまむ他国たこくハ志こころ
 む江戸えどの寒念佛さむかたがみ裸はだかまありふ比ひふまむとて異こと之これかる苦行くまうりやうをまをゆふ
 やその利益りやくの灼然しやくぜん事ことを次つぎふまう一ひとつ苦行くまうりやうして祈いのまむづきの神佛かみぶつも感かん
 應おこある事ことを童蒙どうもうふ示まは

○寒行さむかたがみの威徳ゐとく

近來ちかごろの事ことありき我われが住塩澤すゑしづより十町じゅうまちあり西南せいなんふありて田中村たなかむらといふ
 あり此村このむらふ右みぎの寒行さむかたがみをまをる者ものありけりある日ひ米俵こめばらを脊せ負おひまう五六町ご五六まちへご
 てる中村なかつむらといふゆへその道みちハ三国海道さんごくかいどうをまむ人ひとありも盤ばん一ひとまむ雪道ゆきみちハ
 人の踏ふりある跡あとのまをまむるゆふありける廣ひろき所ところも道みちハ一ひと條ぢょうゆて其外そのほか
 をまむる腰こしをこそまむ雪ゆきふまむ入いるたてまむゆふ重荷おもひをまむ持もつるハ一ひと武ぶ

家よりとも一足踏退てふ道の譲る雪国の習ひかの田中の者一人
の武士ふゆきのひ重荷をさるもさるより一足ふゆきのさるる武士い声を
あらうげ腹よまといふ今ひと足さるる重荷ゆきさるる雪ふちりふらんと
あふゆきさるるふせんといふひを無礼のめと肩をつきさるるゆき俵を背負て
いふゆきさるる雪の中へよまふふ不轉び倒れしふ武士も又人ふ投らるる如く
倒れしは田中の者へ早く起て後も又起ししをさるるけりかゝるあふかふト
田中の者さふ来り武士の雪中へ倒れし起るものさるるを不審立上りてさふ
を病平さるるりば武士さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
秘と病人とも又さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
あて身を動さるる不思議と驚怖るをさるる武士さるるの事ありさるる五体
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

雪譜卷之下

いひをさるる心ふかやえあまばさるるさるるさるるさるるさるるさるる
行者さるるあふまをさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
者をさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
をつさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
もさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
まのりさるる方をさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる
田中のものさるるさるる

○雪中の幽霊

我が隣驛関との宿ふつさるる関山との村あり此村より魚野川を渡る
き橋あり流急るさるる僅の出水ゆも橋をさるるゆも仮小造りさるる橋あり
と川廣けさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

ども一夜の内小三尺も五天もつものふもあるゆゑ小日毎中もつものふも三尺幅の
狭き小雪のつもの上をさるるまきバ渡り慣らるものをもつ過て川小おち入り
瀕死たるものも間あり ○さて此関山村のうらやうり小獨り草庵を結び
住む源教といふ念佛の道心坊ありけり年ハ六十あまりに念佛三昧の
法師ありて无学あるまどもその行ハ頑僧中をさく少方せう僧をさく年
毎小寒念佛の行をつとめ无言ハせざるゆゑ夜毎小念佛して鉦打らる
りの小まありてつゞき二夜一度ハかの橋小立り年頃かむとある者の回
向をさるる小今夜ハ満願とてかの橋小ゆりて殊更ふつとめて回向をさる
鉦うちらるる念佛のけり小皎々る月遽然小曇りて朦朧たりて火の
うらと目を開てか糸うちらるる念佛して目をひらき小橋の上三間を
り隔る年齡三十あまりに女向く青ざらるる小黒髪をさくけ

雪譜卷之下

今水よりいそいでりとかもみさるり瀧を袖をさるるあひせて立ち常人さるる呼といひ
て逃ぎ小さるるてその方小身を對つてつゞき小斯聞くありて小か
りのありくと又あるも人さるる橋より又さるる体ハ透徹さるるあはら
あるものも幽小るる腰より下ハありともありともおぼろげにことこを幽霊さるる
志きり小念佛のけり移歩ともさるる小きさるる細微さるる声していりやう
さるる古志郡何村の菊とやもの之夫も子も冥途小さまぞ獨り跡小
のりかをけき烟りさるるさるるさるるさるる五十嵐村小由縁の者ありて
助けを乞ふとてこの橋をさるるさるるさるるさるる水小入り瀕死さるるもの之今夜ハ四
十九日の待夜さるるせふまにさるるさるる誰ありて一擲の水さるる手向人
さるるをむん僧さるるさるるさるるさるる回向ありつる功德小よりてありて死佛果
をさるるさるる頭の黒髪障りさるるさるる閣浮小迷ふあさまさるる上上の絲小
ゆらゆらさるるを刺さるるさるる玉さるるさるる悲哉とて小袖をさるるさるる

佛を嚙まぜ領ひ抚まらば一志が鬘をぬき居たり雪ハ雪簾小あつてきりくと
 音のふのこ四隣さけさば寂として声もくや時もろりけり ○さて幽霊ハ影も
 見えど源教ハ炉小温りて睡眠をのよや一居眠りくつ終小倒きんとて目を
 ひらきふお菊が幽霊何時り來りて佛小對ひまうけさる新薦の上小坐り頭を
 低てぬりさまがの源教も戦慄せし心をあづめてよくこそきりつことのみ小幽
 霊ハさふことばをいひさぞまがて昨夜えさるふさづらだ源教手をそとぎ鹽り
 水をくもり剃刀をもちて立より又さば打もぐさる髪つゆのさるさるりぬきて
 ありさばど雪ふるさるをまらりてさるさるもぬり心ふおあつてさるが髪の毛
 をのさるさるめさるのさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 髪の毛糸をつけり引ぞとくさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 を指ふかきさる剃りさる自然さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 をりりさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 幽霊ハ白く瘦さる掌を合を佛を

雪中幽靈之圖



拜^{まが}らう^{いざ}き^うぎ^うと次^う弟^う不^う薄^うく^うる^うと^うん^うえ^うら^うが^うき^うえ^うら^うせ^うら^う

○ 関山村の毛塚

かくて^{えん}緝^や屋^七兵^衛か^らき^ぬわ^る戸^柵より^をひ^りぞ^さても^怖し^きもの^をえ^はく^る
 事^うる^いふ^法師^のま^はと^てよ^うに^ぞ剃^刀を^あて^玉ひ^らる^さる^さん^あら^うか^り
 き^ひ獨^りく^えん^も気^味ま^ろう^一今^夜は^らふ^痛ら^んい^らぬ^もや^らり^玉待^一人^の
 の^飯り^とま^はぶ^もを^や用^る一^とま^え玉^一后^の証^一ふ^せを^やと^てま^はら^うりの^髪の^毛
 毛^をや^うく^一の^こ一^まま^らう^幽霊^も心^あり^ての^こ一^つん^とて^えせ^はま^はぶ^七兵^衛ら^う
 さ^うの^まま^て手^ゆも^とら^うま^は法^師ハ^紙ふ^つと^らう^佛檀^ふち^き夕^間ふ^のま^ま玉^ひ
 酒^もの^こら^あり^香ハ^あら^うもの^まま^らう^のもの^まま^らう^のま^まら^う二^人ら^う
 炉^のま^まら^う胡^坐ら^うま^まら^う酒^のま^まら^う七^兵衛^がら^う幽^霊と^らら^うの^話め^いま^ら
 つ^らが^えら^うま^まら^うと^袖振^合を^も他^生の^縁と^らら^うの^まま^らう^のま^まら^うま^まら^う
 も^本意^ら一^今夜^を佛^法の^あり^がま^まら^うも^身ふ^まま^らう^のま^まら^うま^まら^う

ゆて百万遍をうてか菊が佛果のいふせん源教をいふ切徳をうて
古志郡のか菊がうまのをうてけり人ふくうり玉(愚僧もこのを
証人とて幽霊をうて教化のうりふせんまをいふもかかあり
と砂石集ふをうてうり人ふまをいふうりげふかやえをうて二ツか
きるをうて夜もふけまバツの夜具をうてうりうりうりけり
○さてあけの日七兵衛源教を伴ひて家ふぬり四隣の人をあつめか菊が
幽霊のうりをうりけま源教懐よりうの髪を毛をとりいりてえまをいふ人
奇異のかひをいふねさて七兵衛百万遍のうりをいふあつまりうり者ども
とまてうり善行のまをいふうり玉(茶の子のうりうりうりうりうり柳坊
ハ茶の用意をうり玉(数珠ハ庵のうりうりうりうりうりうりうりうり
猶人をもまていあせうりうりうりうり七兵衛が妻もうりうりうりうり
むいそのうり餅をつきうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

雲譜卷之下

文漢堂藏

りをうりけり○かくてその夜源教が草庵の人あつまりかこりあひて
念佛あけまぶうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
話柄とけりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
石塔を建て供養せま菊が幽魂黄泉地のかげゆもようごひうりといひ出志
ふかあり心の人あまをうりてそのうりうりうりうりうりうりうりうり
りて源教のうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
寺の上人を招請あまうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
てか菊が戒名をいふか菊が溺死する橋の傍小髪を埋り石塔を建る事
まぶうり人を葬るが如くうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
屋七兵衛ハ此変より發心して右ふ出家しけりうりうりうりうりうり
関山の毛塚とて今ふ残はり

○雲中鹿を追ふ

毎朝てかゝるの木を心のまゝ伐とりて薪ふつくり小屋のやとりふあまこ積
おき心ふ足るやどふりてまじばそのまゝふ積かきて家小飯ることを泊り山といふ
山小とまりぬて
夏をるまゆ多とさて夏秋ふいさまば積かきてる薪も乾ゆ牛馬を駆ひて薪を
家小運びて用ふあつる雪ふらき所ハ雪中み山小入りて推せる事あつる
やまの所為やく我國雪の為ふ苦心もるの二つと右ふいあまこびやうふ水あぐ谷
川あまこも山よりハ教文の下をうぐる翼あけまば汲ことあつるぞふ年歴る
藤蔓の大木ふまといひさるが谷川ハ垂下りさるあり泊り山して水汲りの樽を脊
ふらうー身ハ此ふぢづるをさまりとて谷川ハさぐり水をくるとるの口をつめて
脊あひあさびふぢづるふ縫りてのゆる雪機をのゆるさぬとまり山をさるものこの
ふぢづるあけまば水をくむさるぢづるよや繩を用ふとも此藤の強みよふまど
このゆふ泊り山さるものら此蔓を室のごとく尊ぶとぞひとを泊り山
さるものかろーハことー二月とあり山ハ時連のの七人さるふありて

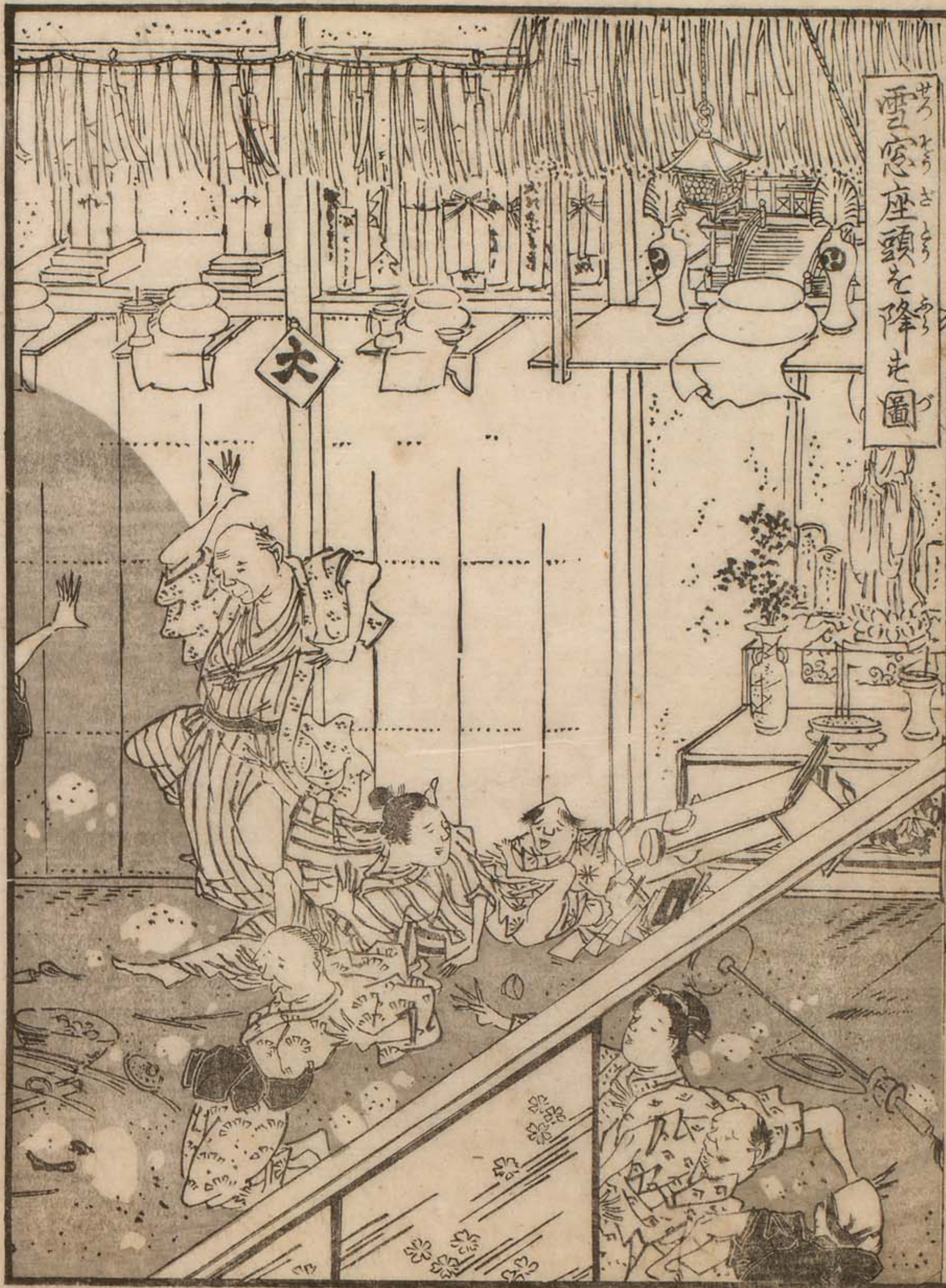
雪譜卷之下

木を伐りて居たりーふ山ハ響くやどの大声ハ猫の鳴ーゆ多人ハ木をま
かのきまら小屋ふあつまり手あくー斧をうま耳をまきうてまけバその声
ちうふありときけバ又遠くふ鳴とやーときけバちうーあまらの猫ととも
ハ其声ハ正ーハ一ツの猫とまきまどまらさうふマをまきまどまのち七人の
ゆのかせくちうくまらる所ふいさるてまらふ凍る雪ふ踏入るとる猫の足跡
あり大きつ絲の丸盒やどありーとくうた天地の造物かゝるものなりともいふ
づらど我が友信州の人のかろーハ同ド所の人千曲川ハ夏の夜釣ふ行ふ人の
三人もをまきやどのをりよき岩水より半いぞるありよき釣場ありとてまらふ
のやりてつりをまきまどぬらうーふまらーありてその山若ふ手鞠やどふ光るもの
二ツ双びまらまきまらうーハふふともふららふ月の雲間をいづらふよーまらば
岩あハあまら大なる蝦蟇あぞありけるひらうーハのハ目ありけり此人はまらる心
地もあく何もうちまらて逃げさるーとくうたぬ

○山言語

右の泊り山とまもつら此地こゝふくぎこぎも外やふもをなる所とこあり小出嶋せいでいじまといふあり上越後
 山根やまねの在あるゆゑももなるなりままぶぶ深山とこふありて事ことををるをふふ山やまととびびとの余
 りてこゝををつつふ忘わすれれる里さとのことびびををつつふ時ときははるるもも山神やまのかみの崇あがりありと
 りいいつつふ他国ほかのくにハハああるるぞぞその山言語やまのこゝろといふ○米こめをを草くさの實み○味噌みそををははぶぶらら
 ○塩しほををかかるるあり○焼飯やきいりををぶぶらら○雑水ざつみづををぶぶらら○天氣あまの好このををぶぶらら
 ○風かぜををぶぶらら○雨あめもも雪ゆきももぶぶらら○舞まひ○蓑かさををぶぶらら○笠かさををぶぶらら○人の死しをを
 ままぐぐららとと又またハハいいふふ○男根おんどんををぶぶらら○女陰おんないんをを熊くまの穴あな此こゝ餘あまああままととありりささの
 とといいふふととああるるももぞぞ女陰おんないんをを熊くまの穴あなといいふふををいいかかめめめめふふここををぶぶららのことををぶぶらら高家たかやの
 竹符調たけふりてうりといいふふものものふふかかるるぶぶらら〜かかるるここををぶぶららをを山やまゆゆ〜つつららぶぶらら山神やまのかみの崇あがり
 とといいふふものもの信しんががつつけけままとと神かみのまハハ人慮ひとりのりををいいかかめめめめふふここををぶぶらら〜証あかしががららぶぶらら
 物ものををや

雪窓座頭を降走圖



○童の雪遊び

我があつひの志をくくりにてかよそ十月より翌年の三月まで六歳
を越へ半年ハ雪の此のふ生息此のふ成長するゆゑとて雪遊ひを
事さぬぐあつて暖国ゆゑの多しその中ハ暖国の人ハあつひもよ
ざるあつびあつて雪を高く掘揚がきつる上を童ども打よりて手あ
びの木鋤ゆき平らふりてあつて雪國中ハあつて雪を
土堀を作るやうふよあつて田をつくりてその間ハ雪めて壁めく所を
くりこふ入り口をひらき隣の家とてあつての田ゆも入り口をひらく此内ハ
宮めく所を作りまふ階をまうけ宮の内ハ神の御体ともえあつて
くりこまを天神さぬと称し多むを大ら、建さどあつて物を煮る所
をも作るまづとて雪ゆき作りとて雪をくちめぬをまじりて火をくち
又城ともいふ見曹右の雪の堂の内ハあつて物など煮て神ゆもさげ

鬼おにはしるしめもむしりてしるし窓まどよりののぞきやまんとしるしおはしりてしるし
よめもむしりてしるし窓まど言ことばのしるしおはしりてしるし口くちはしりてしるし母ははの左右ひだりみぎよりしるしおはしりて
しるしけりかゝるをしるし人も人の座まりぬる后うしろの方かたふらさきあり窓まどあり
ぐまびり音ねありてしるし窓まどをやぐり楳うめむげの雪ゆきがうくと崩くづきおちる中なかの人
の降ふりしるしけしむ女おんなの呼よびてしるしうづて愕おびえ然ま迷まひ男おとこはさき立たわ
りておどろきけり下部しもたらもこのおとろきまをせよと崩くづきおちる雪ゆきはまわれ
たる人ひとをえまむ此家このうちへも常とこふまする福ふく一いちとのお按摩あんまとりの小座こざ頭かぶけり幸さいひ
疵きずもうけぞあるむ抚おまひ腰こしをささるる福ふく一いちのりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
目めも下部しもたらふおちる雪ゆきをとりけ窓まどをまくりふつらひらごもせまわりの妻つま
もろもろしるし福ふく一いち鬼角おにかくどめ鬼おにのそなへまをまむしるしお鬼おにうとまひひ
比ひまきの成なりひやせりめむしるしの夜よふ盲めくらが窓まどよりありしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
ありとろしりておけとてまむらふまうりけしむあつとまむあつりのひぞ福ふく一

雪譜卷之下

しるし窓まどよりおちりしるしおはしりてしるし福ふく一いちちちまむしるし
所ところはしるし今夜このよのおめむしるしをやさんとてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
や楳うめむげの道みちまのふらちちひてあしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
しるし窓まどをまむしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
りぬ娘むすめも娘むすめも口くちをそろ人ひと鬼おにやとてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
りぬあつりのしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
のしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
鬼角おにかくもろしるし福ふく一いちまむらうりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
福ふく一いちかしるしをしるしものを按おむるさぬありしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
はらまむしるし玉たましるししるし福ふく一いちはしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
まむあつりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし
言ことば方かたら福ふく一いちとのおはしりてしるしおはしりてしるしおはしりてしるし

ろのうゝあゝ人々めぞりくときまうト手あど拵ていさきよりこびやうび
 盃をぬぐうけりありぬんつきの羽織を娶ふよりいさせよ哥のろく
 とて福一ふとせけき膝ふのせよあやまの高名あつとてあま
 をうけよよろこびつめぞう歳越ふきをたぐりせんとして羽かりきまぐらで
 さぶりうらちをつりて猶よろこびけり之が吉瑞と成らん此年此家の娶初産
 小男子をまうけ申ひもあておひより三ツのとり疱瘡もかろくして今年七
 つふありぬ福一はる伶俐のあり一ゆゑ今江戸ふありて宜ふもまうと聞
 ぬ目ぞした事どもありけり

画者 少年 京水百鶴



北越雪譜初編卷之下終 全三卷大尾

文溪堂近刻書目

北越雪譜後編 三卷 越後 鈴木牧之編撰 京水百鶴画圖
江戸 京山人百樹刪定

右前編ふりして雪申神社の祭事佛閣の法會民間の行事
 大小雪車の制作用状雪中種々の奇談珍説を記し雪の消終る
 までを圖ふあり北越の雪中を目前に視るが如き書也

骨董集二編 上帙二卷 醒齋京傳先生遺稿
 下帙二卷 京山人百樹翁補訂

右舊板曾て本舖に購ひ得るゆゑ京山翁ふとて醒齋先生
 の遺稿を索め翁正し補訂を下し之以上梓也

女粧考 五卷 京山人百樹編

上古より近古までの女の風俗の古圖をのせ古書を引く其風俗の
 沿革を考へ鏡櫛をもちあはるゝ女の容飾の道具るゝび小燕脂
 白粉の始原眉を拂ふ夏鍔漿をつける事のもの其譯説など
 まづ女風俗に係りたる事をのりて記せり

和漢印章考 五卷 同編

本朝古印の模本を圖し其制度の用格を弁む其考(漢印の) 涉る所以て和漢と目せし朱象賢が印典の作格に倣ひて記り

食物沿革考 同編

昔の食物と今の食物と寔格在る事を弁し食器の古圖をのせ考を記せり

芭蕉翁年譜 同編

一名を芭蕉年代記 翁一代の始終を記せり 妓女高尾十一代の傳を記し 遺器遺墨を考へてのせり

高尾考 同編

茶湯初心抄 同編

茶道を学ばざる人此書をまよひ 茶席ふつゝなりとも耻をともさざる 四季の詞はさう多りまづ俳諧に用ゆるべきものありしを 註釋し見るふ見せし引ふ速なるを宗とて席上の重宝 ありしをのり

俳諧早引草 著作堂主人著

東都著作堂主人著 玄同放言 第一集三冊 第二集三冊 第三集三冊

出来 天地之部植物之部人事之部亦人事之下より 器用之部に至るこの篇はをさく珍説奇談を雜 識し且縮字を多く載せし闕するものありしを 志むるを上に集ふ比ぶ俗の耳にたると多り 器用之部より動物之部に至る古器異獸奇鳥等 の圖説多く此集中に有異聞珍説多し闕するもの ありしを佳境に入らん就中佛法僧鳥の寫生古人の 摹本を多くありて異同あるを著す此他北越の雪 び異魚海獸の画面を多く寫生を首とせし小罕 あり物種々載り

同 第三集 三冊 同 第四集 三冊 此集全部十二卷に至りて始めて全書に遠く全書とらんものなり 近刻

天保七丙申年九月發兌

大坂心齋橋筋博勞町

河内屋茂兵衛

書肆

江戸小傳馬町三丁目東側

丁子屋平兵衛壽梓

新
後
十

五
年
月
日

